
レイ

uma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルイ

【Nコード】
N9680H

【作者名】
uma

【あらすじ】
ルイと名乗る少女と、一人の少年のお話。

ルイはいつも突然現れる。

たとえば僕が登校するとき、朝食を食べているとき、買い物に行くとき、本を読んでいるとき、お風呂に入っているとき、テレビを見ているとき、掃除しているとき…。

ただどいつもいるって訳でもない。ほんとにいつ現れるかわからない。突然なのだ。

ルイが現れると僕はいつも驚く、そりゃあそうだ、人がそう簡単にあつちこつち現れていたらたまらない。

ルイが初めて僕の前に現れたのは大体一年位前だ。彼女は自分の名前をルイと名乗った。そのほかの事はあんまり喋らなかった。聞いても良くない気がした。

初めて会ったのは僕の部屋だった。僕はベッドに寝転がりながらハードカバーの本を読んでいた、図書館で借りたものだ。

そしてふと、時計を見ようと思いい目を本から離すと彼女がいた。

彼女は僕に小さな声で「こんにちは」と言った。そんな時はどうするか、「こんにちは」と返すしかない。

僕が「こんにちは」と彼女に言い返すと、彼女は小さく一度うなずくようにしてから、顔を伏せた。

彼女も本を読んでいるようだった、ここからでは読んでいる中身まではわからなかった、しかし見覚えのないような字であった。

しばらく沈黙が続いた、なぜか僕は何も言えなかった。彼女は絨毯の上に正座し、あまりに自然にそこに座っていた。

まるで図書館で目の前に座っている人が軽い知り合いだった、そんな感じだ。

あきらめて本を読むのを再開し、しばらく経ってまた見てみると、もうそこに彼女はいなくなっていた。

一度、僕はルイを幽霊の類ではないかと疑った。しかしその後、彼女が幽霊ではないとわかった。

夕方、下校中にルイが現れたときの話だ。

帰り道、夕方にぼくがひとりで家に向かっているとき、背後から小さな足音が聞こえてきた。

振り返ると彼女が僕の後ろを歩いていた。

彼女は少しうつむいて、相変わらず何も言わずにただ僕と同じ歩調で歩いていた。

初めのころは突然出てくるたびにいちいち驚いたものだったが、その頃にはもうだいぶ慣れてしまっていた。

そして、何かを尋ねたり、問いかけたりしても答えてくれないということも分かっていた。だけど、

「こんにちは」

「…こんにちは」

挨拶にだけは答えてくれた。

彼女はただ、静かに僕の後ろを歩く。僕も何も言わず前を歩く、人通りの少ないその道ではただ二つの足音だけが聞こえてくる。

沈黙の中に心地よさを感じる。喋るのが下手な僕にとって他人との間にできる沈黙は苦でしかなかったのに。

彼女といるときだけは、この空気が不思議と心地いい。

その途中、僕らは人と会った。

「お、久しぶり」

小学校の時のクラスメイトだった。今は学区の違いで、別々の中学校に通っている。

「うん、久しぶり」

「元気してた？」

彼が尋ねる。

「うん、元気だよ」

僕も答える。すると彼は、僕の後ろの方に目をやり、

「あれ？ その女の子は…、友達？」

「え…」

そう言われたとき、少し驚いた。

「…見えるの？」

「見えるの？ ってお前…、幽霊じゃないんだから」

その頃、僕はつきりルイが幽霊のような、僕だけに見えるような何かではないのかと思っていたのだ。

でも、違うようだとその時わかった。

後ろを振り返ってみると彼女はさっきまで下の方に向けていた目を、僕の方に向けていた。

口には出さなかったが、何かを言っている目だった。

その後、大した話もせず、彼とはそのまま別れた。クラスメイトといっても何十人という中の一人だから。

そうして日々は過ぎていく。

彼女は何も言わず、

僕も何も聞かなかった。

僕が本を読んでいるとき、彼女もいつも本を読んでいた。周りに人がいるとき、彼女はあまり現れなかった。

ぼくが一人でいるとき、彼女は頻繁に現れた。

僕は一人でいることが多かったから、

たいてい彼女が一緒にいた。

これで良かった、

ルイがいたから。

「ねえ、ルイは」

僕はある時、一番聞きたかったことを聞いてみた。

「なんで、僕のそばにいてくれるの？」

彼女はゆっくりと、本から顔をあげて僕を見た。

答えなんか期待してなかった。けど彼女は、答えた。

「…あなたが、寂しそうだっただから」

その静かな人の声は、沈黙よりも、心地がよかった。

時は過ぎて、僕は高校生になっていた。

友達を作ろうと意を決して部活に入った。そのおかげか友達も少しずつできていった。

ルイは今でもたまに現れる。けど部活などで一人になる時間が減った僕は、彼女を見かける回数が少しずつ減っていった。

ある夏の夕方。部活の終わり、その日はいつも一緒に帰っている友達が部活を休んでおり、一人で帰っていた。

生徒も既にいない道で、後ろから小さな足音が聞こえてきた。

その久しぶりに聞いた足音は、前と同じように僕の歩調に合わせて聞こえてくる。

何か懐かしい感覚を覚えながら、振り返ることもなく歩き続ける。

しばらく歩き、自分の家がだいぶ近付いて来たところで突然聞こえていた足音がやんだ。

音が止まったことに気づき、不思議に思っただけのをやめ、振り返る。

彼女は俯いてはおらず、真っ直ぐに僕の方に目を向けていた。

それは、どこかで見たことのある光景だった。

それもまた、何かを言っているような目で。

そして彼女は静かに笑った。ほんの少しだけけれど。けどちょっとだけ泣いていたような気もする。

彼女の笑った顔を見たのは、それが初めてだった。

そして僕に背を向け、ルイは言った

「ばいばい」と。

それがとても、悲しかった。

涙は出なかった。それでも僕は悲しんでいた。

（後書き）

沈黙が心地いいってのは、話していて楽しい、という事よりも難しいことだと思います。

自分は喋っていないと不安になるタイプなので、憧れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9680h/>

ルイ

2010年10月8日15時44分発行